
花幻物語

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花幻物語

【Nコード】

N6586G

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

春、花開く季節に語り継がれる、幻のような物語。昔語り風のお話で、一話完結形式になっています。「春・花小説企画」参加作品

第一章 連翹の章（前書き）

「春・花小説企画」参加作品です。

バーナーから企画サイトへ飛んでいただくか、「春・花小説」で検索していただくと、他の方々の作品も読めます。

（最終話のあとがきで花言葉の解説をしています）

第一章 連翹の章

春は色とりどりの花開く、艶あでやかな季節でございます。

移り行く時の中で、自己の存在を世に示そうと精一杯に咲き誇る、美しい花々。

その清らかで優しい香りは、時に人々を和ませ、癒し、また時には惑わせることもございます。

これからお話す物語は、まるでひと時の幻のような春のお話を集めたもの。

時代も場所も様々な、色鮮やかな花々にまつわる物語を、ごゆるりとご堪能くださいませ。

*

第一章 連翹レンキョウの章。

花幻物語、最初にお話いたしますのは、連翹の章。

大陸の端に突き出た半島、朝鮮と呼ばれたその台地の、小さな国のお話でございます。

山里深く、日も暮れかけた薄暗い道を急ぐ、旅の駕籠かごがございました。

四人の男たちに担がれたその駕籠に乗るのは、二人の女性。一人は女官、もう一人は身分の高い姫君のようでした。

艶のある長い黒髪を綺麗に結い上げて、色鮮やかなチマチヨゴリを着込んだ姫君は、その美しい容姿に似合わない曇った表情のため

息をつきます。

「銀珠様^{ウツシユ}。どうかなされましたか」

そう問う女官に、姫君は物言いたげな顔をなさいましたが、すぐにあきらめたように首を振りました。

ちょうどその時、峠に差し掛かると、駕籠を担いでいた男たちがあわてたように声をあげたのでございます。

すぐに駕籠は止まり、女官が何事か訊ねようと小窓を開けたその時でした。

強い風が吹き、黄色い小花がひらひらと駕籠の中に舞い込んできたのです。

「まあ、ケナリの花が」

女官がチマの上に着た黄色い花を手に取ります。小さく可愛らしい四弁の花を見て、今まで暗く影が差したような顔をされていた姫君も少し瞳を和ませたようでした。

「こら、お前！　そこをどけ！」
和らいた雰囲気に水を差すような駕籠舁^かきの声で、姫君が小窓から顔を覗かせます。

するとそこには山道の真ん中に寝転んでいる子供がいたのでございました。

「何をしている。すぐに道を開けるのだ！」

駕籠舁きの男が怒鳴っても、子供は寝転んだまま動こうとはしないのです。

空を見るようにぼんやりと開いた瞳に、何を映しているのか子供の薄汚れた手足と粗末な身なりに顔をひそめ、いよいよ力づくで男たちがどかせようと近づきました。

「これ、おやめ。お前たち。少し離れていなさい」

姫君の声に驚いたようにしながらも、男たちは駕籠を下ろし、脇にどきました。

女官が止めるのを制して、姫君は駕籠から外に出ました。

鮮やかな赤いチマが風に少し翻るのをおさえながら、姫君が静か

に歩みを進めるたびに、チヨゴリの胸元に下げられた花模様の帯飾^しりがそつと揺れます。

「何をしているの？ 具合でも悪いのかしら」

優しくしゃがみこんで訊ねた姫君の声で、子供はようやく我に返ったように瞳を瞬かせました。

「いいえ。ただ見ていたんです」

「見ていたって何を」

再び訊ねかけた姫君は、子供の視線が道の両脇に並んでいる木々に注がれていることに気づきます。

「ああ、ケナリのことかしら。そうね、ちょうど見頃ですものね

」

そう言いかけて見上げた姫君の瞳は、驚きに見張られました。

先ほど舞い込んできたケナリの花から、満開に咲き誇っているところを想像したのに、今日にしたケナリの木には一つの花も咲いていないではありませんか。

低木の細い枝は、寂しく枝垂^{しだ}れるばかりで、そこには蕾の一つすら見つけれられないのでした。

「まあ、どういふことかしら。さつき確かに風に乗って……」

頬に手をあてて呟いた姫君に、体を起こした子供が答えます。

「咲かないんです。もう」

「あら、なぜ？」

「木が病気にかかってしまったから。咲きたくても咲けないのです」

「まあ、そうなの。それが悲しくて木を見ていたの？」

寂しそうな子供の顔を見て、姫君は同じように瞳を翳らせて聞きました。

すると子供は頷き、姫君の顔を食い入るように見つめるのです。

「あなたは どうして泣いているの？」

その言葉に姫君は驚き、あわてて自分の顔に手をやります。もちろん涙などどこにも流れてはおりませんでした。

「泣いてなどいませんよ。なぜそんなことを言うの？」

子供はしばらく黙って姫君の化粧が施された美しい顔を眺めると、
こう言います。

「泣いているように見えたから　あなたの心が」

透明感のあるような、不思議な子供の瞳が姫君の胸を打ちます。
綺麗に結い上げられた黒髪が幾筋わずかに風にゆれ、姫君は静かに
瞳を伏せて微笑みました。

「そうね……ええ、確かに泣いていたわ」

言って姫君はいたずらっぽく笑うと、女官と駕籠舁きの心配そうな
顔から隠れるように子供の手を引き、ケナリの木の根元に腰掛け
ます。

そんな風に道に腰掛けるのも、随分久しぶりだと姫君は思いまし
た。

「私も病気にかかってしまったのよ。咲きたくても、咲けないの。

このケナリの木と同じね」

垂れたケナリの裸の枝を撫でながら、寂しげに言う姫君を、子供
は首を傾げて見つめます。

「どうということ？」

無邪気な子供の瞳に一瞬迷ったように姫君は視線をそらしました
が、ふっと微笑んでから子供の頭に優しく触れました。

「赤ちゃんがね　産めなくなってしまったの。病気にかかって、
体は治ったのだけれど、赤ちゃんはもう望めなくなってしまったの
よ。だから、あの方のお心も遠くなってしまった」

あなたにはよくわからないでしょうけれど、と姫君は付け加えて
から、長い睫毛を伏せて黙ってしまいました。

その美しい顔は透き通るように白く、ともすれば青白くも見えま
した。チマの上で組まれた姫君の細い手を見ていた子供も、同じよ
うに黙っておりました。

夕暮れの近づいた峠は、段々と肌寒く、風も強くなってきました。
「銀珠様。もうそろそろ発たなければ」

待ちかねたように言いに来た女官に促され、姫君は立ち上がりま

した。子供も一緒に身を起こします。

「お腹がすいているなら、干菓子ぐらいならありますよ。少し分けてあげましょうか」

姫君はそう言って笑いかけましたが、子供は静かに首を振りしました。

そのまましばらく姫君をじっと見ていたかと思うと、ずっと姫君の胸元を指差しました。

「それ」

「え？」

何かと自分の胸元に目をやって、姫君は結ばれたノリゲのことを思い出しました。

「それをもらえませんか？」

子供はまっすぐに姫君のほうを見つめて、訊ねます。

七宝焼きで作られたノリゲはもちろん高価なものなので、姫君は一瞬驚いて、隣の女官と顔を見合わせました。とんでもない、という目で子供を睨んだ女官の腕を引いて、姫君は微笑みます。

「ええ、いいわ。あなたにあげる」

「銀珠様！」

あわてて声を上げた女官に姫君は悲しそうな瞳で呟きます。

「いいのよ。こんなもの、どうせ他の女にも買いつけてくれるものですよ。あの方の心は、もう戻ってくることはない。子を産めない女など、殿方にとっては何の役にも立たないのだから」

先ほどまで感情の見えなかった姫君の瞳は、いまや隠しようもない悲しみを湛えておりました。

何も言えなくなった女官の前で、姫君はノリゲを外します。まるで全ての苦しみがそこに映っているかのように、ノリゲをしばらく見つめてから、姫君はそうつと子供に手渡しました。

夕日に反射して、きらきらと光る七宝焼きの飾りは、花の模様が彫られたとても美しいものでした。ノリゲの下に垂れ下がる飾り紐は、ちょうどケナリの花のように優しい黄色をしています。

子供は大事そうに受け取ると、自分の胸にあてます。

「ありがとう。これでもう一度咲けるかもしれない……」

小さく呟かれた声が聞き取れなかった姫君は、もう一度聞き返そうと唇を開きかけ、突然吹いてきた強い風に目を閉じました。

今までよりも強い、体さえも持つていかれそうなその風に、女官と姫君は身を寄せ合い、体を縮めます。

そして目を開けたその時には、不思議なことにもうどこにも子供はおりませんでした。

「どこへ行ってしまったのかしら……」

姫君が辺りを見回しても、人がいた名残すらなく、峠はしいんと静まり返っています。

「きつとノリゲを持って、あわてて逃げ帰ったのでしょうか。あんな物乞いのような子供に、高価なものを差し上げるから 全く恩知らずな子供なこと」

我慢ならないように腰に手をあててそう言う女官に、姫君はどこか悲しくなりながらも微笑みました。

「いいのよ。私があげたかっただけなのだから さあ、もう戻りましょう」

何かを吹っ切ったように、そつと微笑んだ姫君は、女官と連れ立って駕籠へと歩き出します。

チマの裾を踏まないように手で持って、少し姫君が俯いた瞬間、女官が息を呑んで、驚いたような声を上げました。

「銀珠様 ご覧ください。あれを ケナリが！」

瞳を丸くしながら女官が指差したその先には、道の両側に静かに立ち並ぶケナリの木々。

なんとその木々には、先ほどまで蕾の一つすらついていなかったのが幻であったかというほど、満開の黄色い花が揺れていたのです。ざいます。

「まあ なんてこと……！」

両手で口元を押さえて辺りを見回す姫君の周りには、風に乗る、

まるで農楽を楽しむかのようにケナリの花たちが舞っているではありませんか。

一面の黄色い花々は、鈴のようなその形から、本当に音を奏でてでもいるかのようにくるくると回りながら落ちてきます。

ひとつ、またひとつと舞い落ちてきた花は、驚いたことに土の上に落ちた途端、すっと幻影のように消えていくのです。

これには駕籠舁きの男たちすら驚いて、声も出せないほどでした。静かで、優しいケナリたちの舞踊　軽やかな黄色い花びらは、降り積もる春の雪のように地面に落ちては消え、落ちては消えて、そうしていつしか辺りは和やかなケナリの香りに包まれておりました。

「銀珠様……」

女官が振り向いた時、姫君ははらはらと流れる涙に今気づいたかのように、驚いて頬に手をやりました。

「そうだわ　本当は私、こうしてずっと、ただ泣きたかったのかもしれない……」

それはずっと心に秘めておられた姫君の本音であったのでしよう。ケナリの舞いが終わるまで、姫君は静かに立ち尽くしたまま、涙をこぼしておられたのでした。

そして全ての花が舞い落ちた後、再び峠は何事もなかったかのように寒々しさを取り戻し、夕闇が落ちようとしておりました。

旅路を急ぐ姫君は駕籠にまた揺られ始めます。

その駕籠を見送るかのように、ケナリの枝はまた元の裸の姿で静かに風に体を傾けているのでした。

「あの子供は物の怪キシンか何かの類だったのでしょうか……」

少し気味が悪そうに囁いてくる女官に、姫君は小窓の外に向けていた視線を戻し、笑います。

「いいえ。あの子はきつと……」

それ以上を語ることはせずに、遠くなっていくケナリの木に思いをはせた姫君は、先ほどまでノリゲが下げられていたチョゴリの胸

元に手を当てて、呟きました。

「私、あの方にお手紙でも書いてみようかしら」

「銀珠様？」

「忘れていたのかもしれないわ。あの方が私をお忘れになっても、私の想いは変わらないのだということ。想い続ける私の心は、自由であるということ」

「銀珠様……」

深い想いがあふれたような姫君の顔を、女官が何とも言えない気持ちで見つめます。

「私は、精一杯生きなくては……最後の力で咲いてくれた、優しいケナリのためにも」

そう言って笑った姫君の顔は、まるで花が咲いたかのような艶やかなものだったのでございます。

遙か昔、半島の小さな国の片隅で起こった、小さな小さな奇跡。

それは確かに一人の姫君の心を変えたのでございました。

これが、花幻物語、連翹の章 黄色いケナリの物語なのでございます。

第二章 藤の章

第二章 藤フジの章

さて、次なるお話は藤の章。

舞台は日本、江戸の町の片隅の、とある長屋から物語は始まりま
す。

宗兵衛そつへえという名の一人の絵師が、長屋の隅に住んでおりました。
絵の腕は良いのですが、無口で無骨な性格からか、仕事を取るの
が苦手で、必然的にその日その日の貧乏暮らし。所帯を持ってもし
い年頃になっても、一人寂しく暮らしておりました。

そんな宗兵衛でしたが、今年もなんとか冬を越してほっと一息つ
いていた、ある春の日のことでございます。

珍しく絵の構図に手間取って、夕暮れ間際になっても仕事が終わ
りません。行灯の油など買う金もないので、あきらめて仕事は明日
に回そうと、宗兵衛はいつもの晩酌を始めたのでした。

そして日もとっぷりと暮れる頃には酒も回って、いつしか宗兵衛
はまどろみ始めていたのでございます。

春にしてはどこか生暖かい風の吹く晩で、夜半、宗兵衛がふと目
を覚ました時には、しとしとと小雨が降っております。

宗兵衛は描きかけの絵を出しっぱなしにしてあつたことを思い出
し、あわてて起き上がり、床に広がっていた紙をかき集めます。

ちょうどその時、とんとんと戸を叩く音がするのです。

こんな夜中に一体誰だろうと不審に思いながらも戸を開けた宗兵
衛は、思わず持っていた紙を落としてしまいました。

それもそのはず、戸口のところ立っているのは、一人の若い女
だったのです。

「こんな夜分に申し訳ありませんが、どうか雨宿りをさせてはいた

だけないでしょうか」

口を開けて突っ立っている宗兵衛に、女はそう言って、丁寧に頭を下げるのです。

すっかり濡れてしまった着物の肩を寒そうに縮めた女を見て、やっと我に返った宗兵衛は、あわてて女を中に通しました。

若い女を家にあげたことなどない宗兵衛は、どうしたらいいものか内心困り果てながらも、しまいこんであつた火鉢を出してきて、女のために火を起こしてやることにしたのでした。

火鉢のそばに腰掛けた女は、両手を火の上でこすりあわせるようにしながら、宗兵衛に言います。

「突然の雨で困っていたのです。本当に助かりました」

顔を上げた宗兵衛は、そう言って微笑む女のアマリの美しさに驚いて声も出ないほどでございました。

少し濡れた黒髪は漆のように艶があり、白い肌は滑らかで、うっすらと塗られた紅が美しく映えております。髪に刺された花簪はなかんざしの藤の花がよく似合う、楚々とした風情なのでございました。

こんなに若くて美しい女が夜中に一人で出歩くなど、めずらしいこともあるものだと言いましたが、それをどう聞くような余裕もなく、黙って座っていることしかできません。

すると女のほうから、宗兵衛の手にした紙を指差して訊ねるのです。

「まあ 絵をお描きになるのですか」

頼まれ仕事なのだと言った宗兵衛に、女は物珍しそうに近寄ってきて、描き損じた絵をしばらく見つめておりました。

雨は静かに降り続けばかりで、一向に止む気配もありません。しばらくとりとめのないことを訊ねてくる女にぼそぼそと無愛想に返事だけしていた宗兵衛でしたが、もう話すこともなくなると、沈黙に一層参ってしまうのでした。

火鉢の灯りだけが部屋の中を照らしており、なんともいえない雨の匂いが二人を包んでおりました。

茶でも淹れてやったほうがいいのだろうか、それともそうこうする間に雨も止んでしまつたろうか。もしもじと思ひ悩む宗兵衛に、ふと女が思い立ったように言うのです。

「あの、よろしかつたら私を描いてはくさいませんか」

何を言うんだ、と驚くばかりの宗兵衛に、はにかむように笑いながら、女は続けます。

「自分で言うのもなんですけれど、私、今が女の盛りだと思つのです。一番若くて美しい姿を絵に残してみたいと願うのはおかしいでしょうか」

そう言われた宗兵衛は、確かにそれもそうだとは思いましたが、今まで女を目の前に描いたことなどないもので、気軽に承諾できずにおりました。

すると女は格子窓から外の雨を眺めながら、なんとも物憂げに息を吐くのです。

「もう、散つてしまつ……」

女の呟きの意味はわからないままに、そのあまりに儂げな瞳に胸を衝かれて、宗兵衛は筆を取ることにしたのでございました。

絵筆を取つて、女を真向かいから見つめた途端、宗兵衛は何かに操られるように指を動かし始めます。

今日一日うまく絵が描けなかつたとは思えぬほどに、宗兵衛の絵筆は進んでいきました。

立ち姿、座り姿もそつがなく、まるで一流の遊女であるかのような色気と、かと思えば無垢な少女であるかのような純粹さをあわせもつ女の魅力に、いつしか宗兵衛はのめりこむように夢中になつていったのでございます。

宗兵衛の絵筆から紙に写し取られていく女の美貌は、まさしく満開の藤の花を思わせます。

時が経つほどに純白から薄紅、そして紫へと、女の魅力は色を変えて、花を咲かせていくようでした。

見れば見るほど、そして描けば描くほど宗兵衛の頭は酒に酔つた

かのようにぼんやりとして、絵筆を進める手だけが自分のものではないように動いていたのでございました。

そうして宗兵衛は何枚も何枚も絵を描き連ね、気がついた時には雨は止み、夜が明けかけておりました。

「本当に有難うございました。素晴らしい絵ですこと」
満足げに微笑んだ女は、宗兵衛にまた丁寧な頭を下げて、出て行きます。

しかしこの時にはもう宗兵衛は、この女と離れたくないという思いでいっぱい、なんとしても引き止めたいという衝動にかられておりました。

けれど常より不器用な宗兵衛ですから、何と云っていいものか、また、それを言っても気味悪がられやしないかと、散々迷った挙句、何も言えずに送り出したのでございます。

ほんのりと明るくなった空には、まだ白い月が名残惜しげに残っております。

女の後姿の、揺れる藤の花簪がどんどん遠くなっていくのを見つめていた宗兵衛は、意を決したように女の後を追うことにしたのでした。

雨でぬかるんだ道を、宗兵衛の下駄がゆっくりと踏んでいきます。あと一歩、あと一歩と距離をつめながら、宗兵衛は自分のくじけそうな心と戦っております。

女はあとからついてくる宗兵衛のことなど知らぬように、静かに歩いていきます。

そして町外れの寺の前まで来て、宗兵衛がついに声をかけようかとした時のことでした。

女の姿がすうつと吸い込まれるように、寺の門の中へ消えていったのでございます。

宗兵衛は腰を抜かさんばかりに驚きましたが、どうしてもあきらめきれずに寺の中へと女を捜して入って行きました。

しかしいくら捜しても女の姿はどこにもありません。

途方にくれていた宗兵衛に声をかけたのは、寺の住職でございました。

どうしたのかと訊ねる住職に、宗兵衛は自ら描いた女の絵を見せながら、今あったことを話してきかせます。

すると住職は絵の中の女を見つめて、顔色を変えました。

「これは 数日前にうちの境内で行き倒れておった娘さんではないか。わしが自ら弔ってやったのじゃ。見間違うはずもない」と、こう言うのです。

そんなはずはないと驚くばかりの宗兵衛の後ろを指差しながら、住職は答えました。

「ほら、あの木の前で、ちょうど倒れておったのじゃよ。わしが見つけたときには、もう息絶えておった。大層美しい娘さんじゃったが、病でも患っておったのだろう」

振り向いた宗兵衛は、目を大きく見開くと、ただ呆然と目の前のものを見つめておりました。

そう、そこにあっただのは、立派な藤の大木だったのでございます。根元から絡み合い、純白と薄紅、そして紫の花をつけた木が重なり合うように立っている、あの女のように美しい花が咲き誇る、藤の。

宗兵衛の頭に、女の髪に揺れていた花簪が蘇ります。そして目の前の花によく似た、儚げで幻のように美しかった女の姿が浮かんで消え、浮かんでは消えていくのでございました。

「昨夜からの雨で随分花が落ちてはしまったが、それでもよく咲いている。美しい藤じゃ……」

そう言って隣に立った住職は、宗兵衛の背に手を置きながら、悲しげな表情を浮かべます。

「あんたが見なさったのは、亡くなった娘さんの亡霊か それともこの藤の化身か、どちらであったのだろうか。若い盛りに亡くなった女の無念を哀れに思った、藤の花だったのかもしれない」

呟いて、何度も一人頷く住職を見ていた宗兵衛は、すっかり気が

抜けたようにその場に座り込んでしまいました。

そしてそのまま長いこと、今を盛りと精一杯に咲き並ぶ藤の花を、いつまでもいつまでも見つめていたのでございます。

その後、宗兵衛は絵に全てを注ぎ込むようになり、いつしか美人画の大家として有名になっていきました。

彼の描いた女の絵には、いつも藤の花が描き添えられており、後の世の人々は、宗兵衛の描く絵を「藤女」と呼んで称えたということでございます。

宗兵衛の胸にいつまでも宿っていたのは、あの夜の女のことだったのでしょうか。絵を通して宗兵衛の心に芽生えたものは、確かに恋と呼ぶに相応しい、熱い想いだったのかもしれない。

これが、江戸の町の片隅の、長屋で起こった一夜の出来事 儂くも美しい、藤の花の物語でございます。

第三章 杏の章

第三章 ^{アンス} 杏の章

花幻物語、最後のお話は杏の章。

古代中国、呉の時代のとある逸話の影にある、花物語でございます。

山深く入ったある里に、一人の医師が暮らしておりました。

医師はまだ年若く、父の仕事を受け継いだばかりでありましたが、父の遺志をつぎ、貧しい人々には無償で治療を施しているのございました。

そのために遠くの村からも患者が押しかけるほどで、また優しく穏やかな性格から、里の皆にも大変慕われておりました。

ところが、自らの衣服は襤褸を着て、食べる物は自分の畑で補い、寝る間も惜しんで薬を作る間に、医師は少しずつ体を害していたのでございます。

ある日、薬草を取りに庭へ降りた医師は、その場で咳き込み、ついに倒れてしまったのでした。

早朝の出来事で、辺りには誰もおりません。

助けを呼ぼうにも目の前がふらついて、声を出すこともできないのです。

意識が混濁する寸前、医師の苦しい視界の中にふわりと淡紅色の何かが揺らぎました。

そして次に気がついた時には医師は床の中で、誰かの優しい手が額に触れておりました。

「先生、先生。大丈夫でございますか」

そう耳元で訊ねるのは、若い娘の声なのでございます。

あわてて飛び起きた医師は、枕元に心配そうに座っている娘を見

て驚いて声も出せません。

「あなたが助けてくれたのですか」

ようやくそう問いかけた医師に、娘はそつと頷き、少しはにかみながら、額の濡らした布を換えてくれました。

「どうぞやらひどいお風邪を召していらっしやるようですね。どうかゆっくりと寝ていらしてくださいませ」

娘はそう言うと、医師の代わりにてきぱきと働きます。

やってくる病人にも、医師の指示の通りに薬を調合し、看病をし、畑や薬草の世話もこなす娘には、里の人々も感心するばかり。

ふせっている医師や、一人働く娘を心配して、いつしか一人、また一人と医師の仕事を手伝ってくれるようになったのでございました。

娘は毎日医師のためにと薬湯を煎じ、飲ませます。医師も見たこともない薬湯で、これを飲むと、喉の痛みがすうつと和らいでいくのでした。

これには医師も驚いて、どこかで習ったのか、どうやって作るのかと訊ねましたが、娘はただ笑って首を振るばかりでございました。可憐な娘の華奢な体が動くたび、淡紅色の衣装が揺れます。不思議なことに、娘の近くに寄ると、いつもほんのりと甘い良い香りがあるのです。

医師はとても良い気分です。娘は時折医師のほうを見つめては、恥ずかしそうに微笑むのでした。

そんな娘の優しく、愛らしい笑顔が、いつしか医師の心までも癒してくるようになっておりました。

そうして七日の日が経った頃、医師はすっかり元気になりました。「あなたにも親や帰る家があるのでしょうか。私のことはよいから、もうお戻りなさい」

医師は寂しいと思う心とは裏腹に、笑ってそう促しましたが、娘は何も言わずにここにおいてくださるように、と頼むのです。

里の人々も、明るく優しい娘のことを気に入り、いつまでもいて

もらえばよいと医師に勧めます。

医師は迷いましたが、娘を帰すことを思うといつの間にやら心が苦しくなるほどに、娘を想う自分の気持ちに気づいてしまったのでした。

こうして娘と医師は共に病人を治し、働き始めました。

医師は娘への恋心に悩みましたが、生来の気優しい性格から、娘に迷惑になるのではないかと思うと、想いを告げることもできずにいたのでございます。

ところが、一日一日と時が過ぎていくうちに、娘の様子がどこかおかしくなっていくではありませんか。

あれほど可愛らしく、愛らしかった頬も少しずつ痩せていき、白く美しかった手も細くなっていくばかりなのでございます。

ついにはどうしたとか、娘は床から起き上がれぬほどになっておりました。

「一体どうしたのだ。どこか痛いのか、苦しいのか」
ひどく心配して訊ねる医師にも、娘は静かに首を振ります。

医師が手を尽くしても、娘の具合は一向に良くならず、季節はいつしか移り変わろうとしておりました。

ある月の美しい晩のことです。

医師はやつれた娘の様子を見るに見かねて、せめて少しの助けにはならぬかと、祈り始めたのでございました。

煌々と光輝く月を見上げ、医師は一人手を合わせます。

「どうか娘をお助けください。彼女は私の全て。どんなことでもいたします。どうか私から、あの娘を奪っておしまいにしないでください」

医師は必死で祈り、庭の真ん中にひれ伏しました。

月の綺麗な晩には天帝への願いが聞き届けられるという言い伝えを思い出したことでした。

両目を閉じて、願い続けてどれくらいの時が経ったのか　ふと
医師は優しく甘い香りが風に漂ってくるのに気づきました。

顔を上げると、目の前に立つ杏の木が目に入ります。

はらり、はらりと淡紅色の花びらを落とす杏の木の根元に、いつの間にか娘が佇んでおりました。

「寝ていなくてはだめではないか。さあ、早く床に――」
驚いて駆け寄った医師に、娘は弱っていたのが嘘のように、なんと美しく清らかな微笑みを見せるのです。

「やはりあなたは私が思ったとおりのお方。花神かしんも優しいあなたの心を知っている。そうしてたった今、天帝に願いは聞き入れられました。私に残された時間はもう終わります。けれど私は何度でも戻つてまいります。春が来るたびに。杏の花が咲くたびに。あなたが私を想い続けて下さる限り……」

そう言った娘の淡紅色の衣装が風にはためき、まぶしいほどの月光に照らされた娘は、そのままゆっくりと杏の木の中に溶け込むように、すうつと消えていったのでございました。

なんとということ　言葉も出せないままに杏の木を見上げていた医師は、風に乗って、一つ、また一つと落ちてくる杏の花に手を差し伸べて、大事そうに胸に抱えました。

可憐で愛らしいその花は、娘の微笑みそのものに思えます。

医師は涙が頬を伝うのもかまわずに、杏の花にそつと口付けました。

「そうか　お前が私を癒してくれていたのだね。決してお前を忘れやしない。春が来るのを心待ちにしよう。お前に再び会えるのを、毎年指折り数えて待つことにしよう。私の想いはいつまでも変わらないのだから――」

そう言って静かに微笑んだ医師は、淡紅色の優しい娘が嬉しそうにはにかむのを見たような、そんな気がしたのでした。

医師はそれから無償で貧しい病人を治療し続け、その代償にと、庭に杏の苗を植えてもらうようにしたそうでございます。

春が来るたびに優しく花開く杏の木は増え続け、いつしか医師の庭は立派な杏の林になったという　この言い伝えから、中国では

今も医師を「杏林」と呼んで敬うというのは有名なお話。

けれど、杏の花と医師との密かな約束を知る者は、誰もいなかったそうでございます。

これが、花幻物語、杏の章　優しい娘と医師の、静かな静かな恋物語。

*

さて、場所も時代も様々な花の物語、いかがでしたでしょうか。

咲き誇る花の数だけ、そのお話も様々　語りつくせぬほどでございます。

しかし花の濃厚な香りに酔ってしまったては、不思議な花幻の世界へと誘われてしまうやもしれません。

今宵はこの辺りで、おしまいにいたしましょう。

あなたの心には、どのお話が残りましたか。

美しく、今を盛りと咲きつくす花々を、少しでも愛でていただけ
たなら幸い。

花幻物語、いつかどこかで、またお話することになりましたしょう。

第三章 杏の章（後書き）

花幻物語を読んでくださった皆様、ありがとうございました。

「春・花小説企画」主催者の文樹妃でございます。

拙いながら、企画の趣旨「春の花とその花の花言葉をイメージした作品を書く」ということで、書いたこの作品。

一章ずつ、お話に出てきた花について少しでもだけ解説させていただきます。不要な方は読み飛ばしてくださいませ。

まず第一章 レンギョウ 連翹の章。

イメージした花はレンギョウ。黄色い小さな花をたくさん垂れた枝につける低木です。

花言葉は「希望」です。「叶えられた希望」という花言葉もありますが、本作品では望みがなくとも、「希望」に生きようとする女性を描きました。

レンギョウの木は大変強い木で、垂れた枝が地面につくと、またそこから根を出して新しい枝が誕生するそうです。

主人公の女性が悲しみの中、愛に生きる強さを連想しました。

そしてこのレンギョウ、韓国語で「ケナリ」と言い、韓国の花言葉も「希望」そして「私の愛はあなたより深いのです」というものがあるそうです。

後者のものをふまえ、愛しい人は背を向けてしまったけれど、自分の愛はその人よりも深いのだと気づいて、想い続けようと本作で主人公は決意する流れになっています。

続いて第二章 フジ 藤の章。

皆さんもご存知、藤の花は白や薄紅、紫などの色をした、房状に咲く花です。

花言葉は「恋に酔う、陶醉」です。絵師の宗兵衛が女と遭遇した

一夜、その短い時間で「恋」に落ちた彼の心に重ね合わせています。また「佳客」という花言葉もあり、その意味は「好ましい客」だそう、女と出会ったことで宗兵衛は有名な絵師になった。結果として女は彼にとつて、「好ましい客」だったのか。

一夜の恋で、彼は幸せだったのか、それとも そんな問いも秘めた作品です。

そして最後に第三章 ^{アンス} 杏の章。

杏とは桜に似た、淡紅色の可愛らしい花です。

花言葉は「乙女のはにかみ、慎み深さ」で、医師のもとへやってきた娘の可憐な様子を連想させます。

実の核の中の「杏仁」という成分は、咳止めや鎮静作用があるそうです。

本作の中国古代の医師の言い伝えは本当にあるもので、「杏林」というのは中国で医者に対する尊称だそうです。

(参照：<http://www.hana300.com/anzu000.html>)

製薬会社や大学の名前にも使われていますね。もちろん杏の娘のお話はフィクションですが。(笑)

というわけで、長くなりましたが解説とさせていただきます。

花言葉の情報は基本的に企画サイトに紹介したURLからのものです。

皆様、「春・花小説企画」楽しんでいただけていますでしょうか？
たくさんの方々に参加してくださっております。ぜひ色々な「花小説」をお楽しみいただき、ご感想等お願いいたします。

拙作にも何でもコメントいただけると嬉しいです。

以上、あとがきでした。お読みいただき、ありがとうございます。

た
!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6586g/>

花幻物語

2010年10月8日13時00分発行